Architectural Institute of Japan

日本建築学会九州支部研究報告
第51号　2012年3月

地中海古代都市の研究（１３８）
メッセネの旧ヴルカノ修道院の建築に関する研究

9. 建築歴史・意匠　4. 西洋建築史
ギリシア　メッセネ　修道院　ビザンチン

正会員　○佐伯春奈[1]　伊藤重剛[2]　吉武隆一[3]

１．研究の目的と背景

ギリシアのペロポネソス半島南西に位置する古代都市メッセネ紀元前369年に建設[1]）のアクロポリスであるイソメ山の山頂（標高約785 m）に、ビザンチン時代のヴルカノ修道院がある。ここには古代にゼウス・イソマタス神殿があったとされ、この修道院の切石部材の多くは、この神殿の転用材であるとされている。[2]（図２）

この修道院は１７～１９世紀の間に新ヴルカノ修道院が山下に徐々に新築され[3]、そのためその後無住となり常勤の修道士はいない。毎年８月15日のアギア・パナギア（聖母昇天祭）のときに、聖母マリアのイコンをこの修道院から新修道院へと移すお祭りが行なわれている。

修道院の調査は、メッセネ考古学協会を主宰するテメリス教授が修道院全体の平面図を発表しているが[4]、立面や断面などは発表されていない。つまり建築的な観点からの研究はいまだに殆どなく記録もない。熊本大学ギリシア古代建築調査団（団長：伊藤重剛）は、古代メッセネの遺跡調査の一環として2011年夏に、この中世ビザンチン時代と思われる旧ヴルカノ修道院の実測調査を行なったので、その現状と考察結果を報告する。

聖堂内部に描かれた壁画に書かれた文書から壁画自体の作成時期はオスマントルコ時代の１７世紀前半と判明している。当然ながら建物はそれより古いが、現在までのところ建築年代を確定するような証拠は全く残されておらず、年代は不明である。

２．建物の概要

修道院全体の規模は東西38m、南北29mである。敷地中央の中庭を囲うように、周壁と各部屋が配置されてある。入口は東側で、北側に隣接して鐘楼がある。鐘楼の隣には巨大な岩盤がせり出して周壁がこれに乗り、特異な景観をなしている。入口の南側には建物の中で最も大きな聖堂（kathorikon）がある。この聖堂に隣接して中庭南側には細長い建物が２棟、食堂の南側に２室があるが、その用途は不明である。ここでは暫定的に聖堂の隣棟を「修道院長室」、及びその隣を「集会室」、食堂南側を「宿坊１」、「宿坊２」とする。中庭の北側の高い位置には東西に長い僧坊がある。

２－１　聖堂

聖堂は修道院の最も中心的な建物である。大きさは内法で13.1 × 9.0m、身廊（12.0 × 3.2 m、高さ4.5m）を中心に南側廊（8.6 × 2.3 m、3.3m）、北側廊がある。身廊の東端にアプスがあり、北側廊は東西２室に分かれており、西側の部屋（4.6 × 2.1 m、3.2m）には小アプスが付けられている。聖堂の入口は西側で、南北に長いナルテックス（2.8 × 8.9 m）となっており、南側は床が一段高くなっている。

それぞれの室は全てヴォールト天井となっており、身廊のアプスは半ドームとなっている。また北側廊東側の室のみが半ヴォールトで、これは後世の増築をうかがわせる。またナルテックスのヴォールトは、中央部が高さ5.3 mで東西方向に、両側は高さ3.4 mで南北方向に架けられている。これらのヴォールト天井や壁にはほぼ全面にわたって壁画が描かれており、当然ながらこの修道院の中では聖堂は最も格式高い建物となっている。

建物のいくつかの痕跡から、聖堂は何回かに亘って順次増築されていったことが分かる。第一に北側廊の床高が他室の床高と比較して32 ～ 44cm高いこと、第二に北側廊西側の部屋には小アプスがあること、第三に北側廊の外壁、及び外壁東面のアプス両側に石積みの切れ目が入っていること、第四にナルテックス西壁面は一様に面一に作られているのに対し、東壁面は29cmの厚さで身廊や北側廊の壁に付加される形で造られていること、第五に北東隅の聖具室のヴォールトが半ヴォールトで身廊側の壁面にもたせかけているこ

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

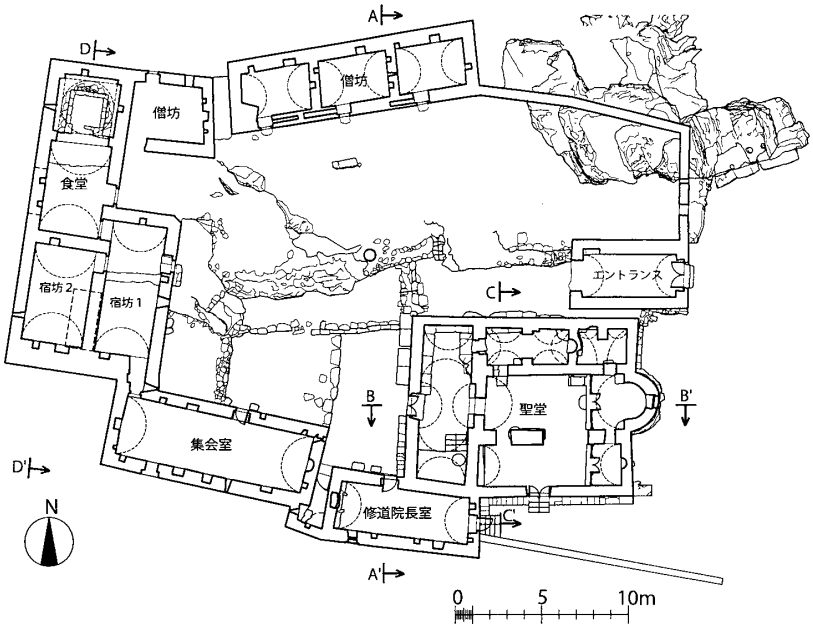


図1　全体平面図

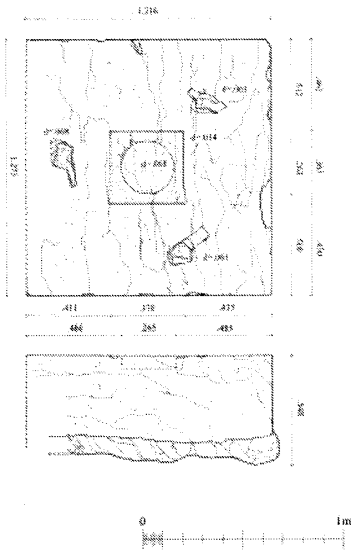


図2　ゼウス神域の三脚台座と推測される部材

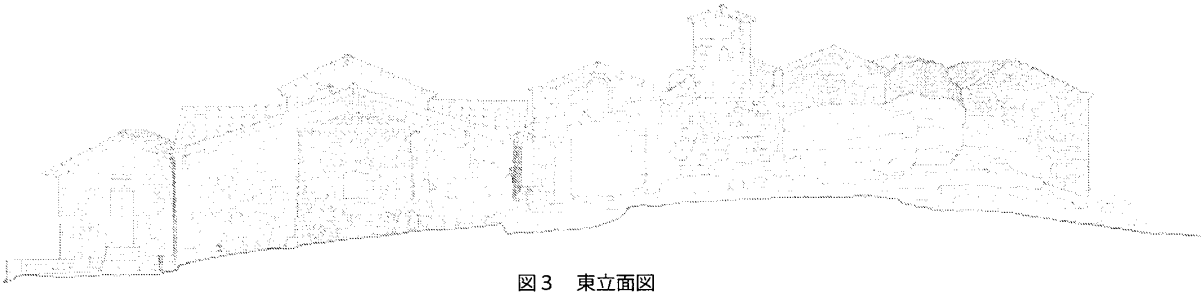


図3　東立面図

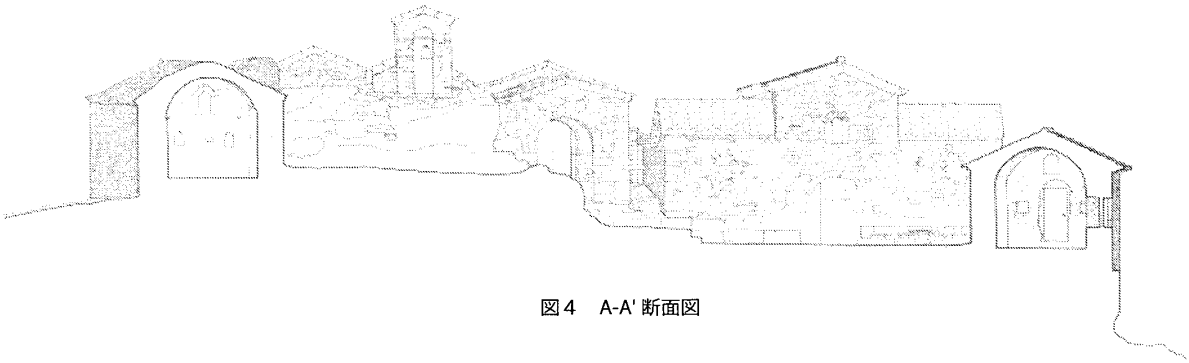


図4　A-A' 断面図

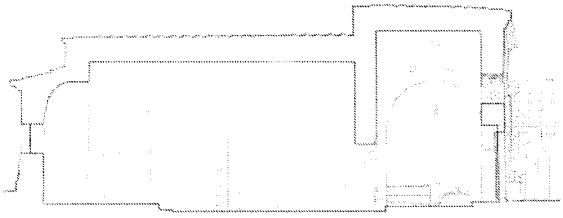


図5　聖堂 B-B ' 断面図

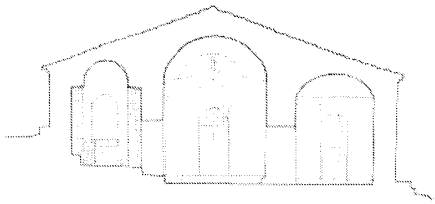
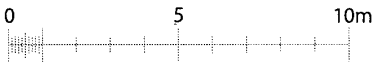


図6　聖堂 C-C' 断面図



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

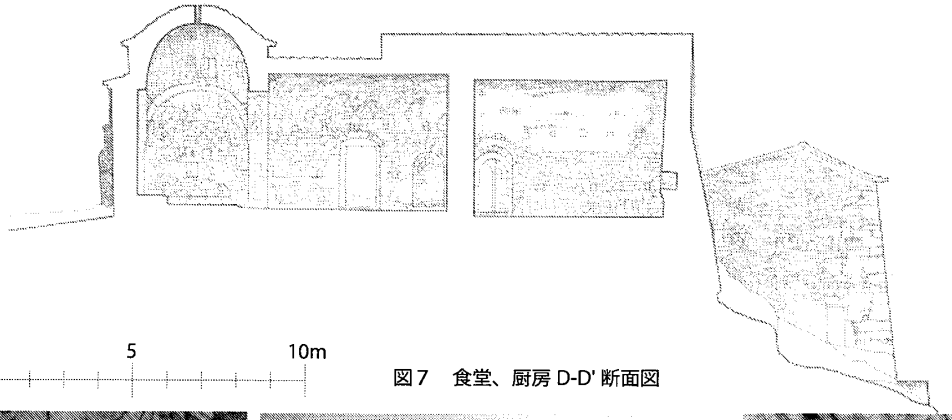


図７　食堂、厨房 D-D' 断面図

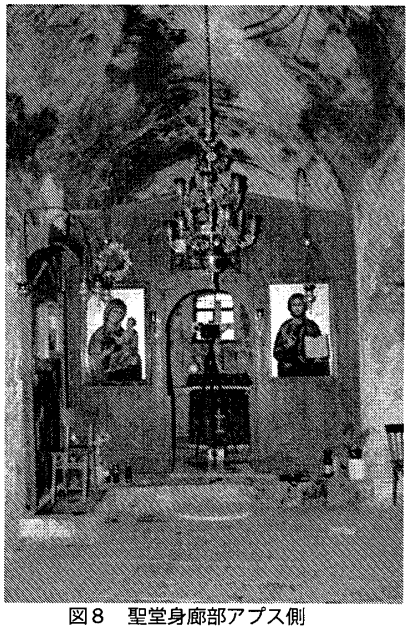


図８　聖堂身廊部アプス側

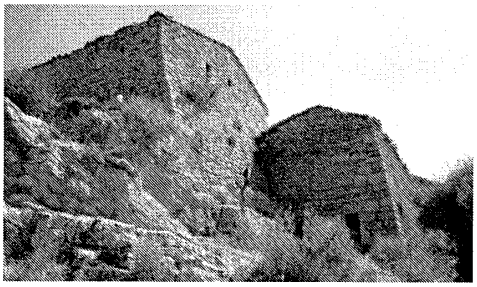


図９　宿坊と集会室南西外観

図１０　中庭と宿坊１東側

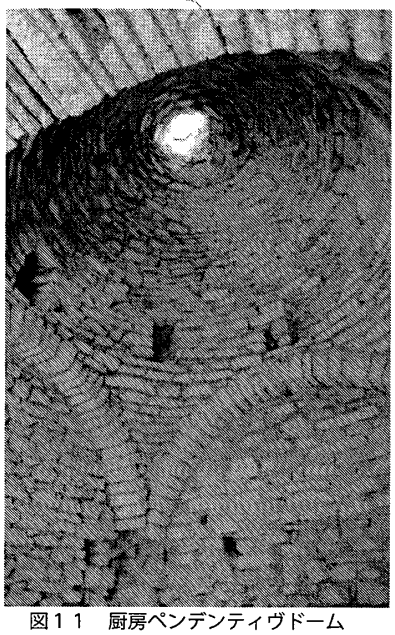


図１１　厨房ペンデンティヴドーム

と、が観察される。以上を考慮すると、聖堂は図８のように順次増築されたと推定できる。つまりまず第一に北側廊西側の小アプスのついて小聖堂が建てられた（①部分）。次にこの南側に増築する形で、現在の身廊部が造られた。（②部分）その後南側廊とナルテックス（③部分）、最後に北東隅に半ヴォールトを身廊に持たせかける形で聖餐準備室が増築された（④部分）。

また聖堂の西に隣接する「修道院長室」と聖堂の壁の接合状況により、南側廊ができた後に修道院長室ができたと分かり、また崖となっている南側の岩盤の状況にしたがって修道院長室の方向を決めた後にナルテックスをつけたと考えられる。しかし修道院長室の出入り口の位置を考慮すると、この３部屋の建設時期に時差は殆どないものと推測する。

２－２　食堂

建築的に見ると、聖堂に次いで注目すべき建築は西側に位置する食堂である。南北に長い一室（3.5 × 9.2 m）であるが、南側が食堂部分、北側部分は厨房となっている。厨房は三方の壁に調理台ないしベンチが付いており、その内側は灰が敷き詰められているので、調理用の炉があったと思われる。恐らく暖をとる場所でもあったと推測される。天井は食堂部分は高さ 4.0 m のヴォールト、厨房部分は高さ 5.4 mのペンデンティヴ・ドームがのり、頂部には煙抜きの穴が空いている。ドームは内観も外観もシンボリックで、建築的には最も技術を要し、修道院の建築の中では建築空間的には最も注目すべき部分である。

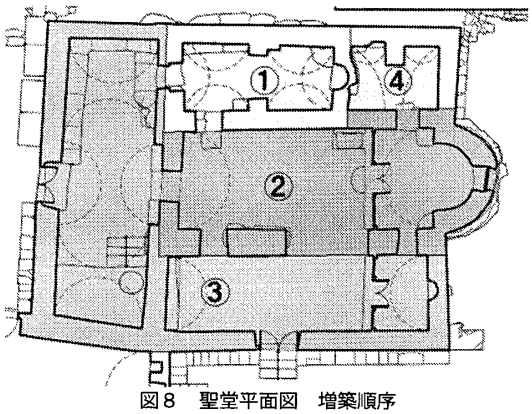


図８　聖堂平面図　増築順序

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

2－3　僧坊

僧坊は中庭の北側の高い位置に配置された東西に長い建物である。内部は3.0 × 2.7mの３つの小室に区切られており、それぞれの東側の壁にはイコンや聖書などを置いたと思われる穴が棚と作られている。僧坊の仕切り壁は側面の壁と一体ではなく、後に仕切られたもののようで、当初は大きな一室として使われたもののようである。天井は高さ３mのヴォールトだが、屋根は石が剥き出しで瓦で葺かれていない。入口は高さ1.3 mであり、この僧坊の西側にも食堂との間に１室の僧坊が配置されている。

2－3　院長室、集会室、宿坊

聖堂に隣接する院長室（7.4 × 2.6 m）、その西側の集会室（10.8 × 3.4 m）、宿坊１（3.1 × 7.6 m）及び宿坊２（3.5 × 5.6 m）は、それぞれ長方形の部屋で天井はヴォールトである。院長室と集会室には、壁面に小祭壇などのための棚用の穴があちこちに作られている。集会室の下には地下室があったが、中は土や石で埋まっており、また外側からのみアクセスできる。

2－4　石積みの技法

修道院の石材は殆ど荒石で、切石は建物の出隅部分や開口部の枠など非常に限られた部分にしか使用されていない。切石は古代にこの地にあったとされるゼウス神殿に属したものと思われ、確かに聖堂の南東隅には神殿に使われたブロンズの三脚をのせた台と思われる石材が再利用されている。

壁の石積みは殆どが大小の荒石を積み上げたいわば野石積み（rubble masonry）であるが、主に以下の４種類のバリエーションに分類できる。第一は、小さな荒石と極少量の煉瓦を積んだもので、僧坊の壁に見られる。第二は、比較的大きな荒石を用いて積んだもので、聖堂東面のアプスより北側、集会室の南側壁面などに見られる。第三は大きな荒石を用いるが、比較的煉瓦の割合が多いもので、聖堂の壁に見られる。第四は、高さを揃えた荒石の層と煉瓦の層が交互に水平に積まれた成層積みで、宿坊１の上部などに見られる。

各室のヴォールトの起拱点の高さ附近及びヴォールトの下から１/３の高さ附近には、いくつかの矩形の穴が観察された。この穴についてはよく分からない点もあるが、他の修道院の例を見ると上の穴はタイバーとして木製の棒を設置した穴で、下の穴はおそらくヴォールトを架けるときの仮枠を支える梁のための穴か、天井板を貼る為の躯体を通すための穴か、あるいは室内でランプなどを吊り下げるための横棒を設置する穴だと推測される。

3．考察とまとめ

この修道院は、特に規模が大きいわけでもなく、またこれまで長い期間、聖母昇天祭かクリスマスなどにしか使用されないため荒れていることもあり、洗練された建築とも言い難いが、ペロポネソス半島のビザンチン建築のひとつの例として貴重な例であることが言えよう。しかし、各室の正確な役割や年代、建築順序などについて詳しいことは、この調査から判断することは非常に困難な状態である。

比較研究のために見学したアテネのカイセリアニ修道院にはペンデンティヴ・ドームの厨房と隣接する食堂、またメッセネ近郊のアンドロ修道院にはヴォールト天井の下に渡した木の梁に天井が張られていた。

今回の調査で、初めて修道院の全体について建築的記録を残すことが出来た。今後の課題としては、ビザンチン時代の修道院建築と広く比較研究を行ない[5]、この修道院の建築史的位置づけを行ない、特に年代をある程度特定する必要があろう。

謝辞

本研究は平成23年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究（S）課題番号20226012（代表：伊藤重剛））による研究助成を受けた。また３Ｄレーザー測量について、テッサロニキ大学コスタス・トクマキディス教授の協力を得た。京都工芸繊維大学の西田雅嗣准教授には、現地を見学して頂き建物に関する数多くの御教示を頂いた。ここに謝意を表する。

註

1）Pausanias, "Pausanias Description of Greece" VI, 27,5-7, Cambridge, 1965,

2）Συγγραφεαζ Αρχιμ. π. Νεοφυτοζ Παωτζηζ, " Ηιεραμονη Βογλκανογ ", Γ ραφιψεζ Τεχνεζ ≪ ΜΕΛΙΣΣΑ ≫ , Α : Εχδοσζ 2005

3）Petros G. Themelis "Anceint Messene", Athens, 2003

4）同上

5）現在までに、堀内清治編者、「地中海建築―調査と分析―１巻」、P157、日本学術振興会、1979年３月24日発行、R. Krautheimer, " Early Christian and Byzantine Architecture " , Hamondsworth and Baltimore, 1965、C. Mango, " Byzantine Architecture " , New York, 1985、等の文献を使用して、本建築の考察を行っている。

1 熊本大学自然科学研究科建築学専攻　修士２年　Student, Graduate School of Science and Technologhy, Kumamoto University
2 熊本大学大学院自然科学研究科教授　工博　Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
3 熊本大学大学院先導機構助教　博（工）　Assist. Prof., Dr. Eng., Kumamoto University

NII-Electronic Library Service